

本庄早稲田の杜ミュージアム企画展

中山道

なかせんどう

と

本陣

ほんじん

休泊控帳

きゅぱくこうちやう

HONJO-JUKU

本庄早稲田の杜ミュージアム
HONJO-WASEDA NO MORI MUSEUM

中山道本庄宿と田村本陣

中山道と参勤交代

慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原の戦い後、中山道は慶長七（一六〇二）年、徳川家康の命により東海道に続き、整備が始まったといわれています。三代將軍徳川家光の時代に制度化された参勤交代は、江戸と領国を大名が一年おきに往来するものでした。沿道の宿場に設けられた本陣ではこれら通行する大名への対応を行いました。

また中山道は参勤交代だけではなく、朝廷から日光東照宮への使者である日光例幣使、京の姫君が江戸の將軍へ興入れするときなどにも利用されました。特に文久元（一八六一）年、一四代將軍徳川家茂に嫁いだ和宮降嫁は有名です。ほかにも江戸時代後期になると庶民による寺社参詣も利用されるなど、多くの人々が通行する道でした。

中山道本庄宿

天正一八（一五九〇）年、徳川家康の関東入国時に、本庄には家康に仕えた小笠原信嶺が一万石で配置され、城下町の整備が行われるようになりました。この頃、本宿・花ノ木辺りに住んでいた「本宿（花ノ木）十八軒」といわれた新田家臣の末裔が中山道沿道に移り住んだといわれています。これらの家はのちに宿役人を勤める家となりました。これ以前の中世末段階で宿場の基礎がつけられていたともいわれ、形成過程は詳らかではない部分も多いですが、慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原の戦いの後、小笠原信之（家康の家臣酒井忠次の三男・信嶺の養子）の時代に本格的に中山道沿いに町並みがつくられました。

本庄宿の繁栄は街道による人々の往来、一本木河岸や山王堂河岸など水運を利用した河岸の存在、そして多くの商人の存在などが背景にあります。天保一四（一八四三）年の『中山道宿村大概帳』によれば家数一二二軒・人口四五五四人（男二六四人・女三九〇人）となっています。



天明六（一七八六）年
本庄市蔵

『東海木曾両道中懷宝図鑑』

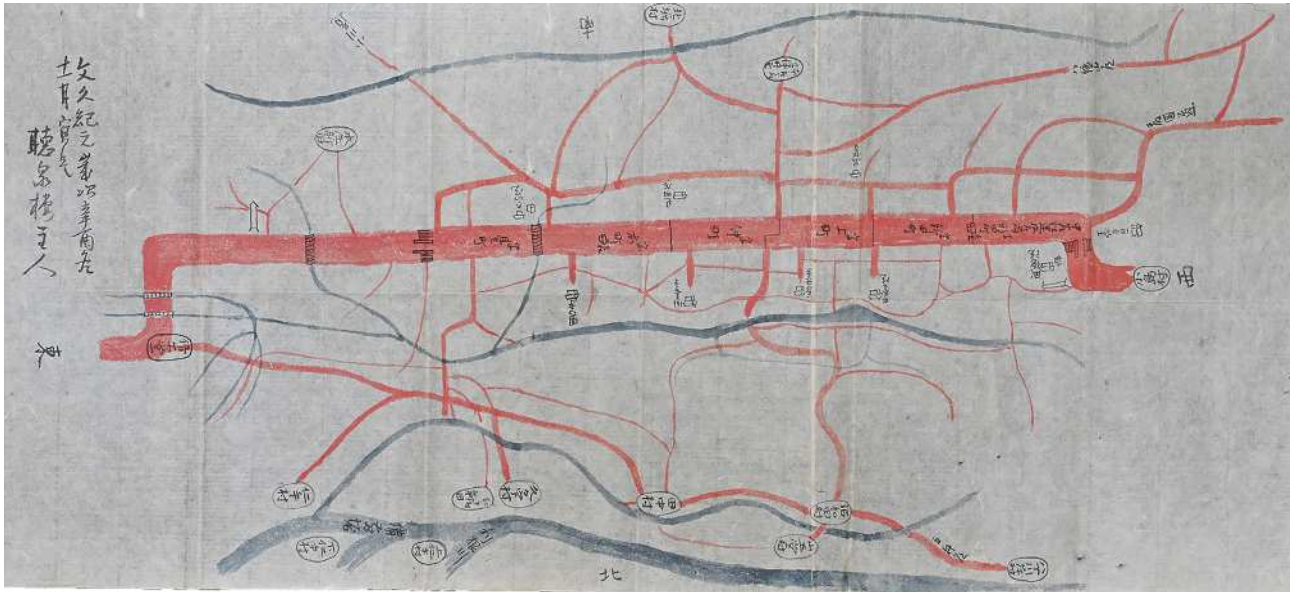


『中山道道中記』

安政四（一八五七）年
本庄市蔵

中山道の各宿場名を中心に距離や問屋名などが書かれており、江戸時代の旅人などに利用されたものと考えられます。

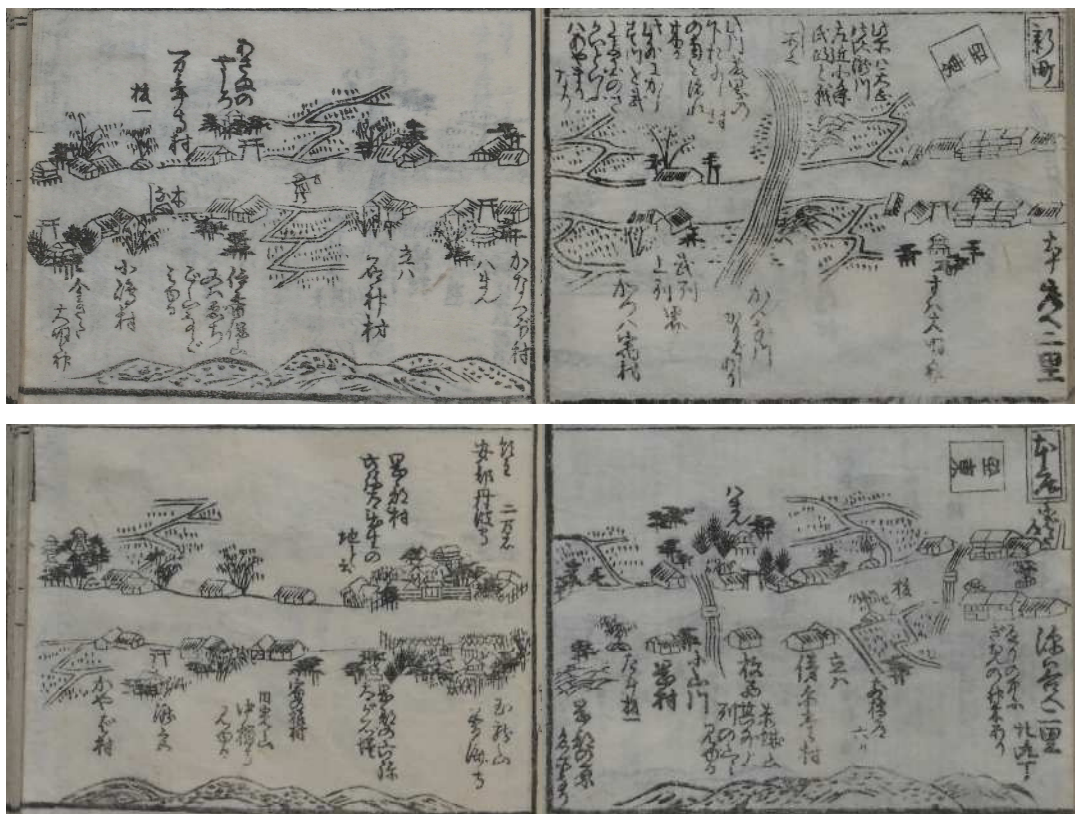
東海道と中山道の道中案内記。視点は北側から南側を見た図を描いています。本庄宿自体の記載は町並みが省略されていますが、左端には「金さな大明神」の文字が見えます。



中山道絵図 本庄宿

文久元（一八六一）年
本庄市蔵

本庄宿の様子を簡略に描いた絵図で、道が赤・川が青に着色されています。宿場内にある寺院も描かれています。また宿場の入り口にはそれぞれ木戸が設けられていたことや、本庄宿との境で支配違いを示す傍示杭と思われるものも表現されています。



『東海木曾両道中懷宝図鑑』（拡大）

田村本陣

本庄宿は寛永一四（一六三七）年に人馬継立場となりました。本庄宿に本陣が置かれたのは加賀前田家が上野国川井河岸（群馬県玉村町）に設けてあったものを移したのが始まりと伝えられています。田村家が本陣経営を開始したのもこの頃であると考えられますが、後年の弘化三（一八四六）年の記録では、「勝手向」は慶長期（一五九六～一六一四）、「御座敷向」は寛永一八（一六四一）年の建築であるとの返答を大名家にしており、田村家の本庄入植はさらに遡る可能性もあります。

その後、寛政四（一七九二）年に脇本陣を務めていた内田家が本陣に昇格し、田村本陣を「北本陣」、内田本陣を「南本陣」と呼ぶようになりました。

田村本陣の当主は代々作兵衛を名乗り、寛政期以降は左惣治を襲名しています。江戸時代を通じて本陣職を務め、明治維新後は戸長を務めるなど中心的な家として存続しています。

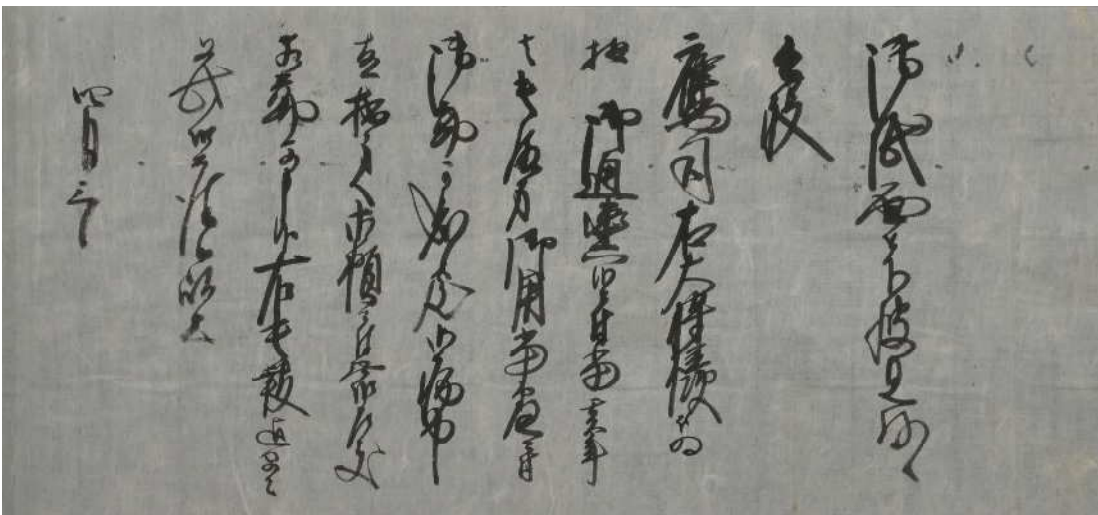


本庄市指定有形文化財
田村本陣の門

明治一〇（一八七七）年に群馬県の島村（伊勢崎市）に移築。その後、昭和四六（一九七二）年に本庄市に寄贈され、現在は旧本庄警察署前にあります。

利用本陣変更依頼の書状

文政一〇（一八二七）年四月三日
個人蔵／本庄市寄託



内田本陣の内田七左衛門から田村本陣の田村左惣治（次）へ宛てた書状。公家の鷹司家が上洛途中に田村本陣で昼休を取る予定だったが、当主の左惣治が「大病」のため、相談の上、内田本陣を利用するようになったことが書かれています。なお本資料は「休泊控帳」に挟み込まれていました。

「休泊控帳」からみる大名の記録

「休泊控帳」からみる本陣のお仕事

田村本陣に休泊した大名や幕府役人などの様子を書き留めたものが「休泊控帳」です。一番古い記録は寛永一九（一六四二）年のもので、その後幕末の文久三（一八六三）年までの二二二年間の記録が残っています。記載内容は記主が一人ではないためか、統一された記述ではなく、内容も近世後期になるにしたがつて詳細に記録される傾向にあります。内容は休泊日・大名の名前・人数・献上品・下賜金・食事内容など多岐にわたり、本陣を利用した大名などの様子が分かるものです。

この「休泊控帳」からは本陣当主の職務にあたる姿を知ることができます。本陣の一番の職務は休泊する人々に滞りなく利用してもらうことでした。そのため事前準備から当日の動き、事後処理まで細やかな対応が必要とされます。「休泊控帳」には利用した大名ごとに異なる対応をしたことや以前の利用との差異などをその都度記録し、後の利用に生かすための工夫の跡が見られます。

田村本陣休泊控帳（二部）

個人蔵／本庄市寄託

左から寛永一九（一六四二）年、正徳二（一七二二）年、嘉永三（一八五〇）年、安政二（一八五五）年、文政四（一八二二）年、文政二（一八二八）年のもの

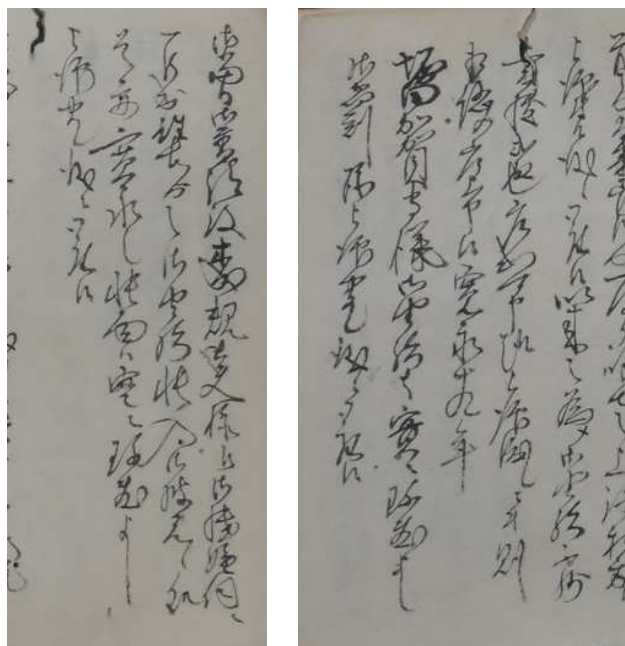


寛永の「休泊控帳」は珍しい

「休泊控帳」安政五（一八五八）年四月一七日

個人蔵／本庄市寄託

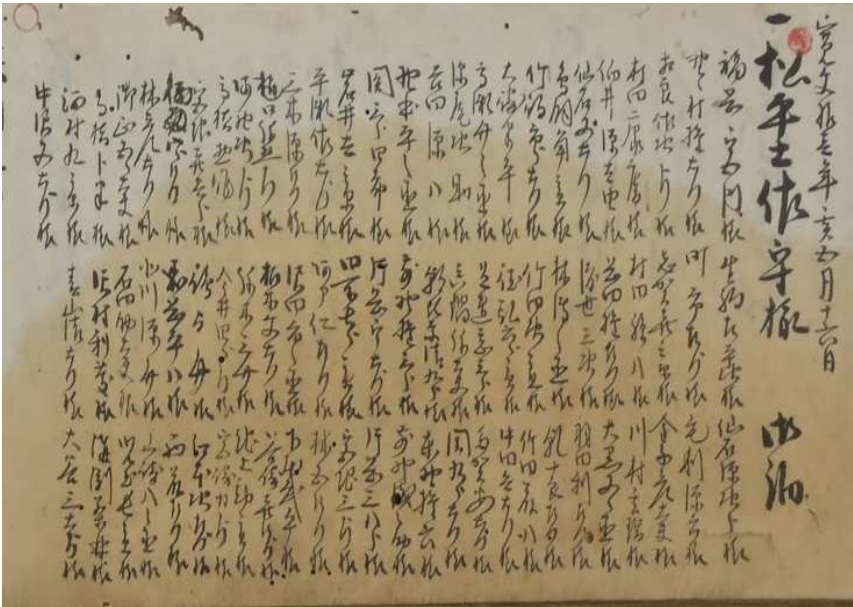
幕府役人が田村本陣を利用した際に寛永年間（一六四二～一六四三）の「往古方之御由緒帳」をお見せしたところ、「寛永之帳面ハ実ニ珍敷よし」との言葉をもらったことが記されています。当時（幕末期）の人々から見ても、寛永年間に記録された「休泊控帳」はとても珍しかったようです。田村家が見せた「往古方之御由緒帳」は最古の「休泊控帳」である「右由緒書抜帳」の可能性ががあります。



江戸前期の「休泊控帳」

「休泊控帳」寛文二（一六七二）年五月一六日
個人蔵／本庄市寄託

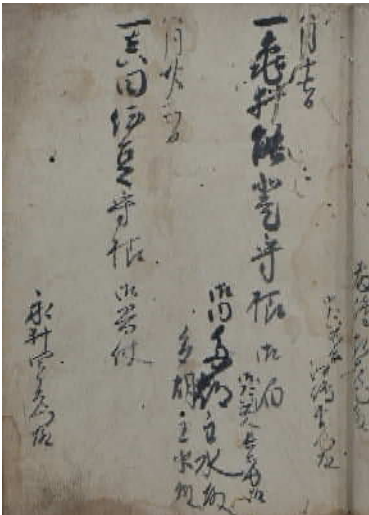
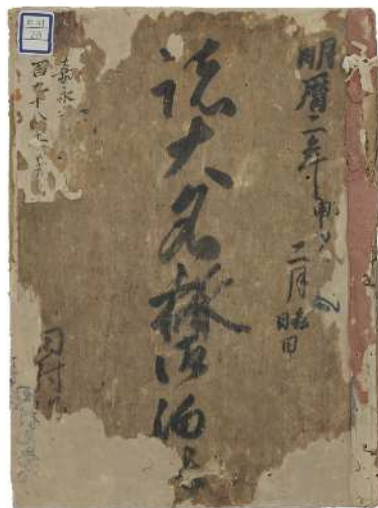
松平土佐守（土佐国高知藩山内豊昌）が宿泊した際の記録。このときの記録では宿泊した際の本陣側の動向については記されておらず、山内家の家臣七九名の名前が列記されています。このような記載方法は寛文三（一六六三）年から延宝四（一六七六）年まで見られます。



真田信之昼休の記載

「休泊控帳」明暦二（一六五六）年八月二五日
個人蔵／本庄市寄託

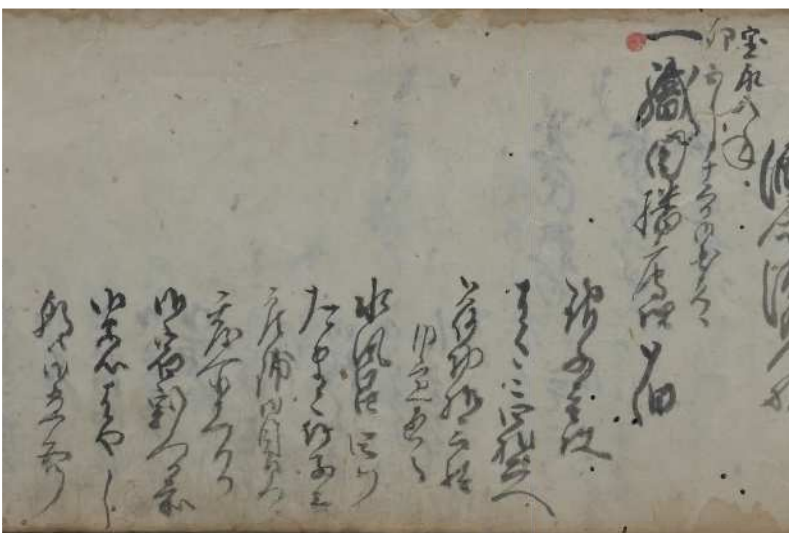
真田伊豆守（信濃国松代藩真田信之（真田信繁（幸村）の兄）が田村本陣を利用した際の記録。記録自体は家臣と思われる永井四郎右衛門を併せて記載するのみの簡略なものになっています。松代藩真田家はこれ以降も田村本陣を多く利用していることが「休泊控帳」から確認できます。



あの織田一族も宿泊

「休泊控帳」宝永八／正徳元（一七一二）年五月二日
個人蔵／本庄市寄託

織田播磨守（大和国柳本藩織田成純）の宿泊記録。柳本藩は織田信長の弟・有楽斎長益の系統にあたります。卯と寅を献上したことが記されています。また当日は本陣への到着も早く、翌日の出立も五ツ時（午前八時）でした。

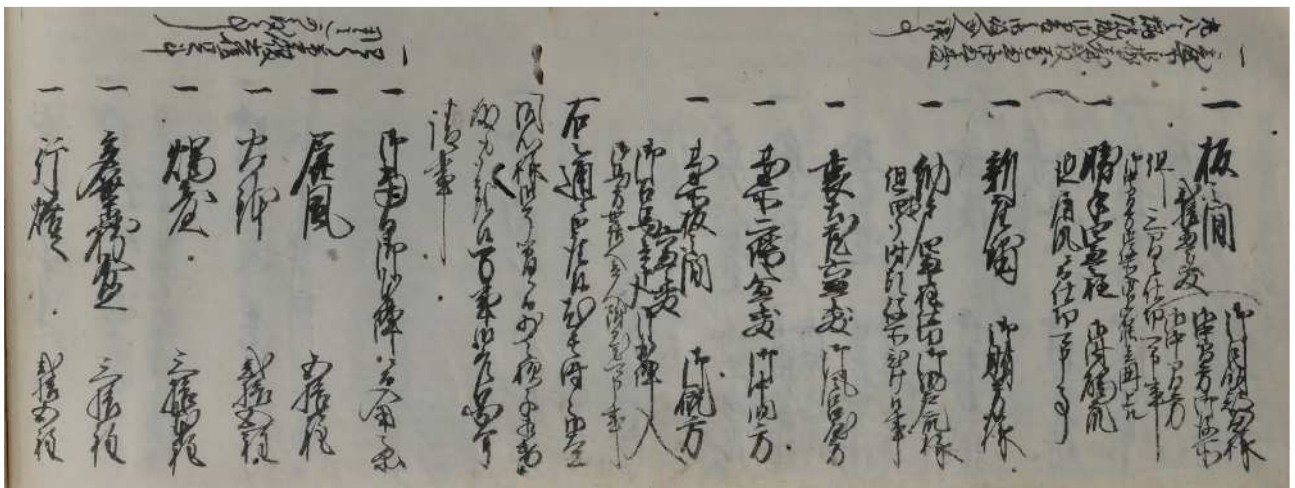




江戸後期の「休泊控帳」

「休泊控帳」文政八（二八二五）年三月一九日
個人蔵／本庄市寄託

尾張中納言（尾張藩徳川齊朝^{なりとも}）が宿泊した際の記録で、本陣で必要なものとして屏風や火鉢、燭台、煙草盆、土瓶（土ひん）や茶碗、五徳（古とく）などが書き上げられます。特に畳は大正院・円心寺など宿内の寺院などからも借用しています。



本陣のおもてなし

宿泊に際しては、本陣側からは献上品が用意され、それに対し大名家などは下賜品や下賜金を渡しました。

田村本陣の献上品としては鶏卵や鮎をはじめとした魚などが多く、ほかには茄子や里芋などの農産物、果物、鴨などの野鳥類が見られます。一方で大名側は家臣を除き、宿泊料の代わりに下賜品・下賜金を渡しました。下賜品では袴や足袋といった繊維製品や布といった生地が多かったようです。

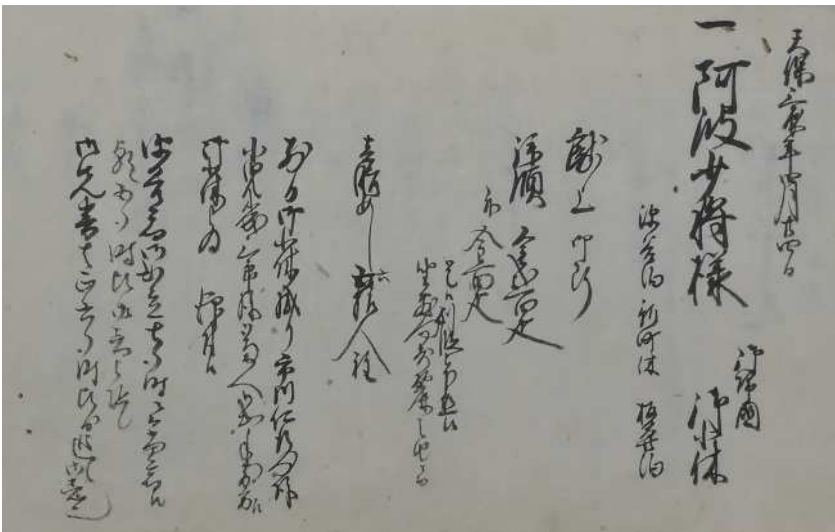
本陣での食事は大名家が料理人を連れてくる場合と本陣で準備する場合があります。「宿泊控帳」を見ると宿泊する藩主の食事は旬の食材を中心に飯・汁のほか二品・香の物との記載があります。藩の規模などによって違いがあったと思われます。

ほかにも宿泊の際に使用する道具類（煙草盆、行灯、火鉢、屏風や燭台）や寝具なども大量に準備しておく必要があります。

藩主より「座敷もきれいである」との言葉を賜る

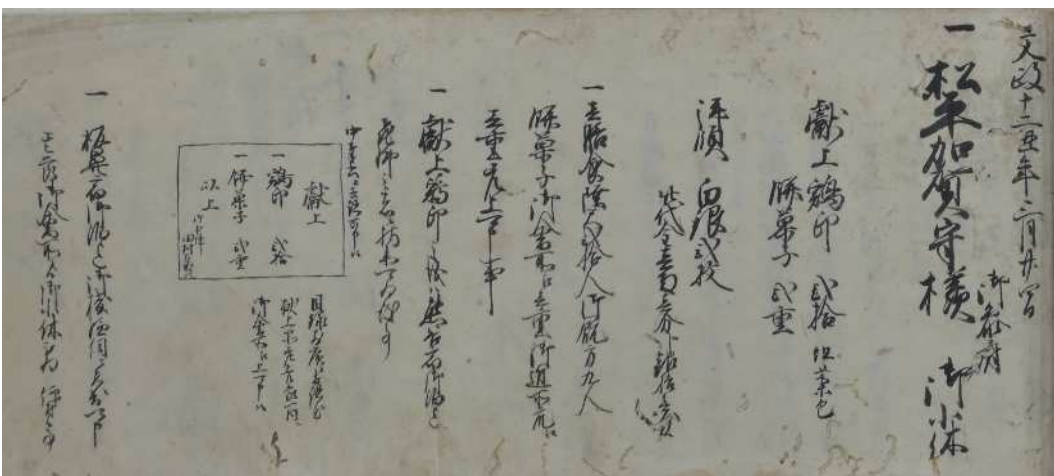
「宿泊控帳」寛文二一（一六七二）年五月二六日
個人蔵／本庄市寄託

阿波少将（阿波国徳島藩蜂須賀齊昌）が田村本陣に小休した際の記録。下賜金二〇〇疋が下されましたが、「座敷向奇麗之由（本陣の座敷がきれいである）」とのことで別に金一〇〇疋が下されました。



献上品の目録の書き方

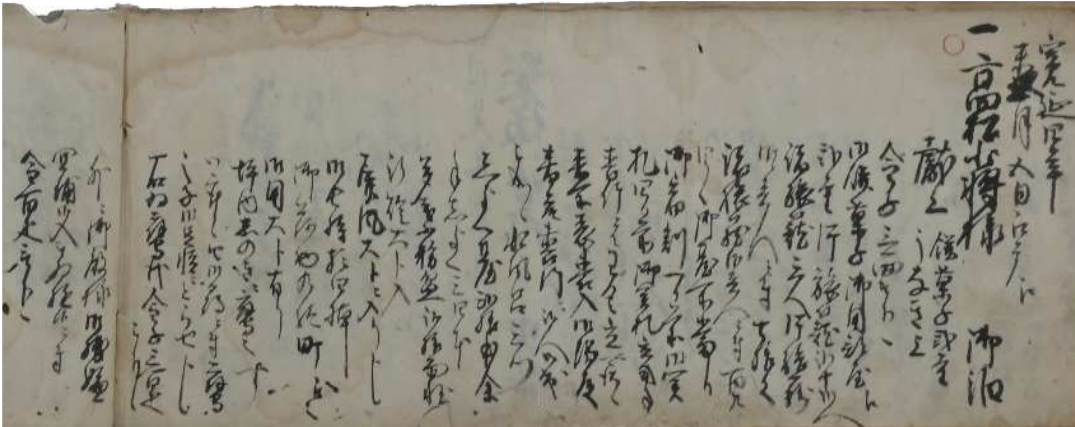
「宿泊控帳」文政二二（一八二九）年三月二四日
個人蔵／本庄市寄託



松平加賀守（加賀藩前田齊泰）に卵と餅菓子を献上した際の献上品目録の写し。目録は事前に準備しておいて、献上品を渡す際に差し出すことが欄外に書かれています。他の大名に対しても同様な目録を作っていたと考えられます。

大名への鷹献上

「休泊控帳」寛延四（一七五二）年五月五日
個人蔵／本庄市寄託



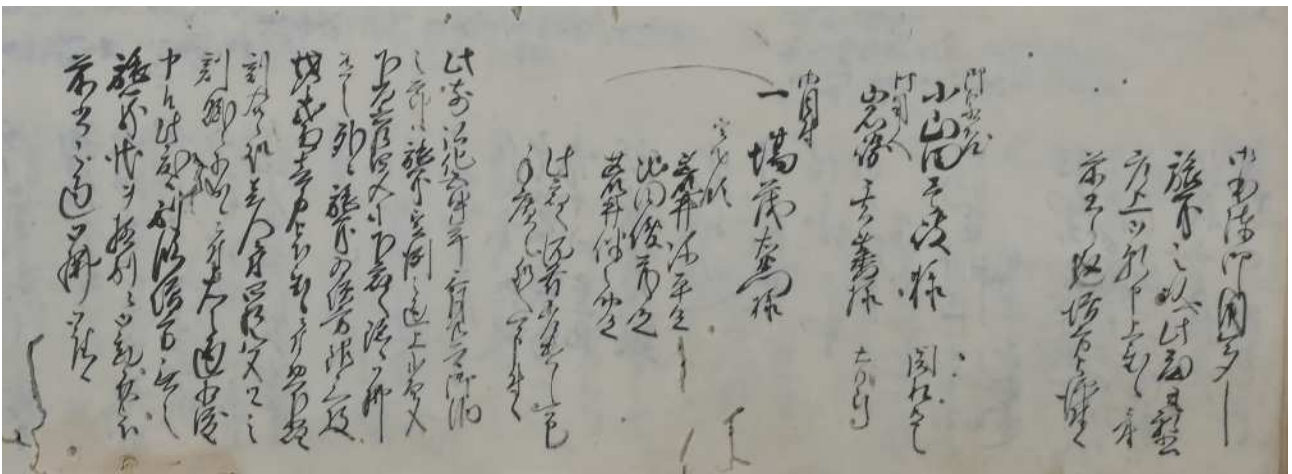
高松少将（讃岐国高松藩松平頼恭^{よりたか}）が宿泊した際、本陣に鷹の巣があり、鷹の子を足軽に取らせました。鷹代のほか、「殿様御機嫌宜敷（とても機嫌がよかったので）」、さらに金子が下されました。また8年後の宝暦9（1759）年に宿泊した際も同様にお尋ねがあり、鷹の子を持ち帰っています。その後すでに情報が伝えられていたのか、同年、越後国長岡藩牧野忠寛の場合、「御庭之内鷹之子手前二而取置候所、御用之由二付差上候（本陣の庭で鷹の子を取り置いておき、希望があったので差し上げました）」とあり、本陣で鷹の準備をしていたことが分かります。

真田家の初入部

「休泊控帳」嘉永七（一八五四）年六月三日
個人蔵／本庄市寄託



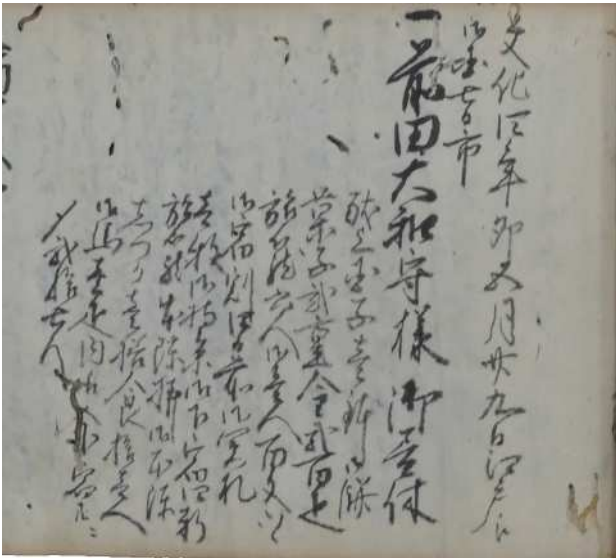
真田信濃守（信濃国松代藩真田幸教^{ゆきののり}）の初入部（初めて領国に入ること）の際に田村本陣に宿泊した際の記録。五日前に宿割役人一〇名が本陣に来ていますが、旅籠に下宿する人数が決まっておらず本陣は「誠二困り入申候」と記しています。そのため念のため余分に旅籠を手配しています。また本陣の手伝いも増やしています。「本陣至而混雑」「御本陣御用多し」とあるように初めての入部で本陣は混雑した様子が見て取れます。ちなみに前回の初入部（文政七（一八二四）年七月二日真田幸貞^{ゆきさだ}）の際は昼休であり、これは小山川出水により深谷宿に六月二九日夜から七月二日朝まで逗留となったからでした。当初は本庄宿にも宿泊する予定であり、本陣側も願ひ出を行いました。藩主が「深谷二夜御逗留二而御体屈（深谷に二泊し退屈）」であるという理由で一宿でも先に行きたいという希望からでした。



七日市藩前田家の昼休

「休泊控帳」文化四（一八〇七）年五月二九日
個人蔵／本庄市寄託

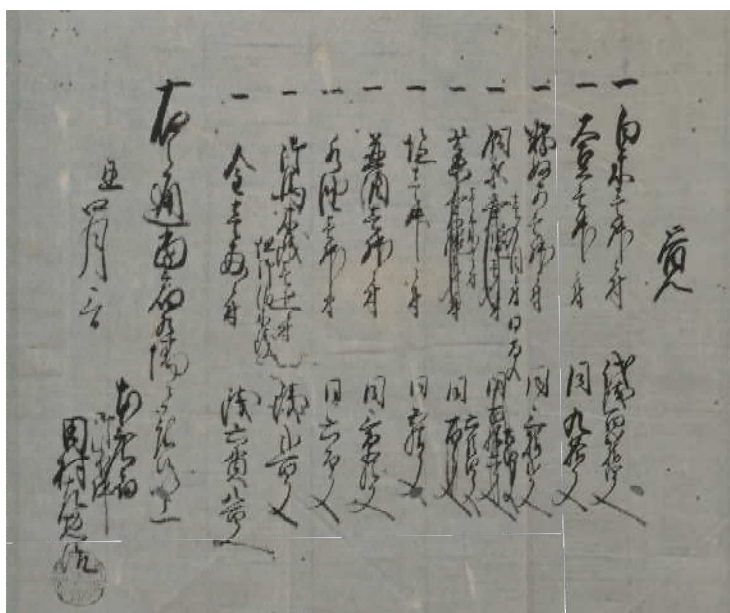
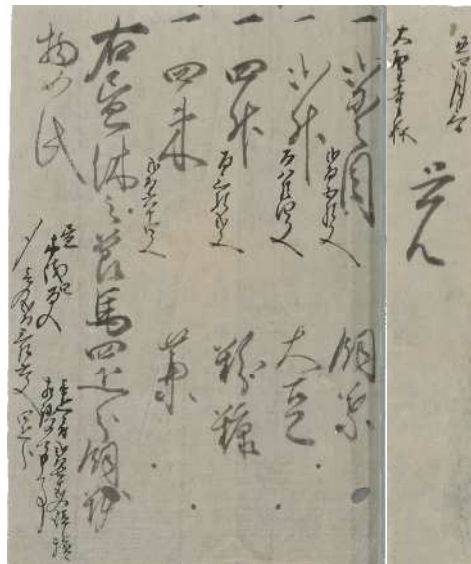
七日市藩は加賀藩前田家の初代利家の五男利孝に始まる藩で、現在の群馬県富岡市に陣屋を構えました。この資料では前田大和守（前田利以）に卵一鉢と餅菓子を献上していることがわかります。他にも宿割（宿泊する際の旅籠などの割り振り）は四日前に行われ、関札（本陣の門などに掲げる札）の持参について書かれています。本陣を利用した正確な人数は不明ながら、少数であったためか「御本陣志つか（本陣内は静かであった）」との記載があります。



藩が本陣で払った品目・金額のメモ

（天保一二（一八四〇）年）四月三日
個人蔵／本庄市寄託

「休泊控帳」に挟み込まれた紙片で、加賀国大聖寺藩前田家へ示した宿場での必要経費の相場となる物が書き上げられています。白米・塩・並酒・水油は藩土などが使用するもので、大豆・米糠・飼葉・藁は馬の食べたものと思われます。馬が泊まる際には木銭（宿泊料）を払うことも書かれています。田村左惣治自身によつて大名家に示されたものと考えられ、貴重です。

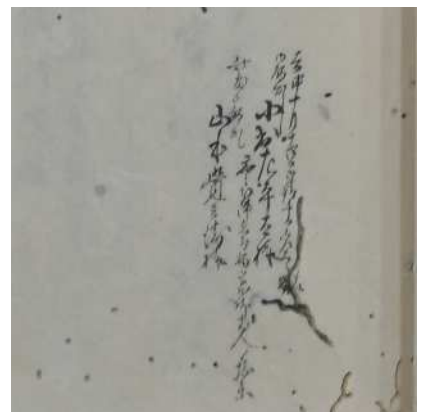
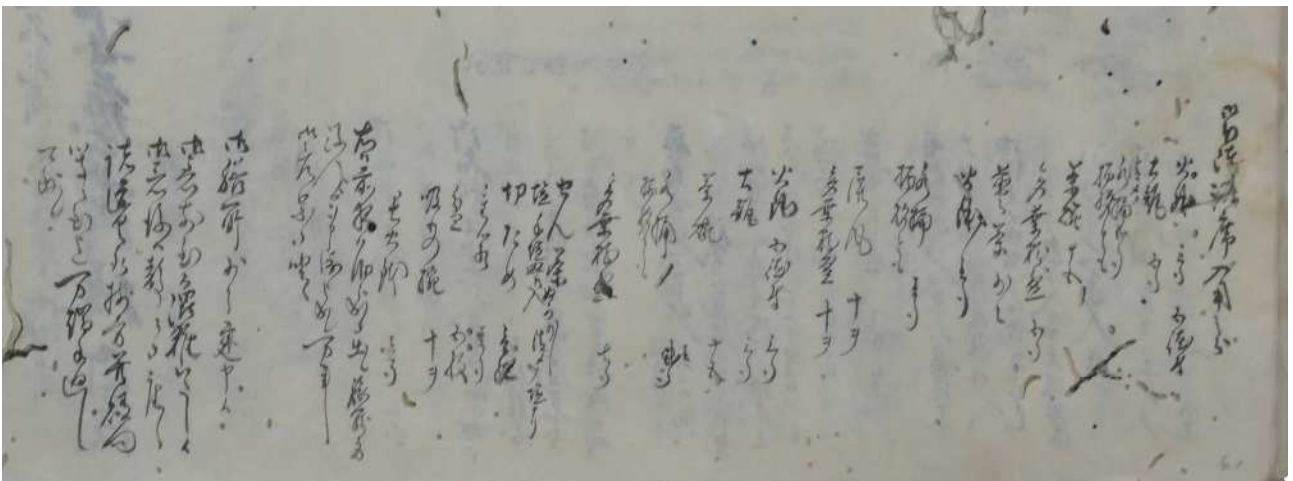
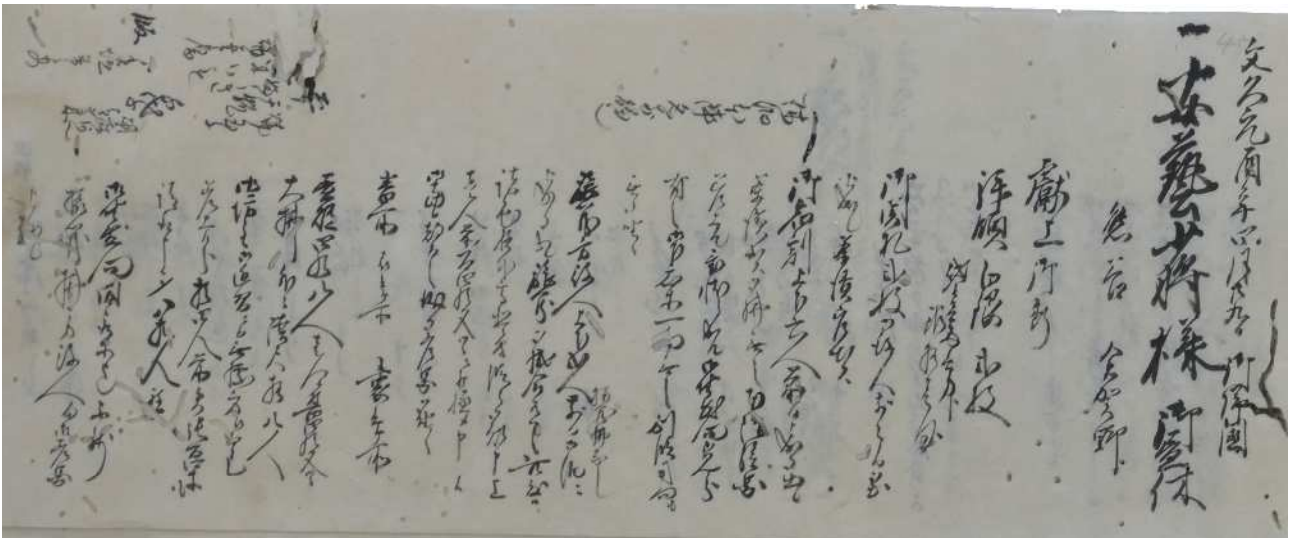


食事・道具類のリスト

「休泊控帳」文久元年（一八六二年）四月
二十九日

個人蔵／本庄市寄託

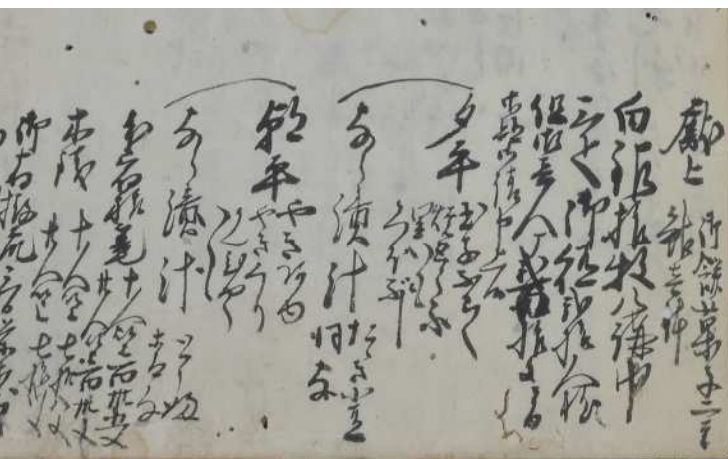
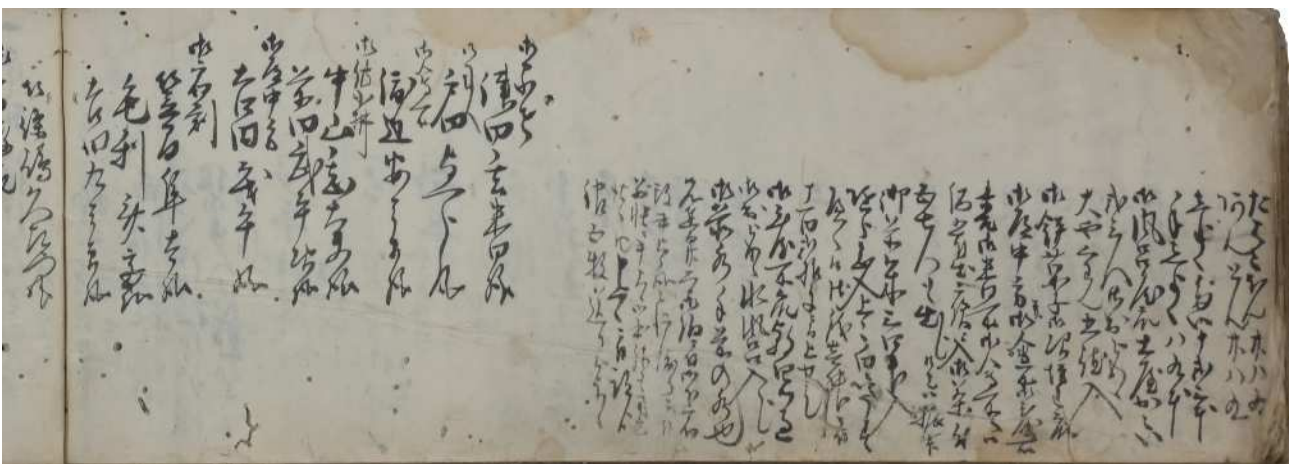
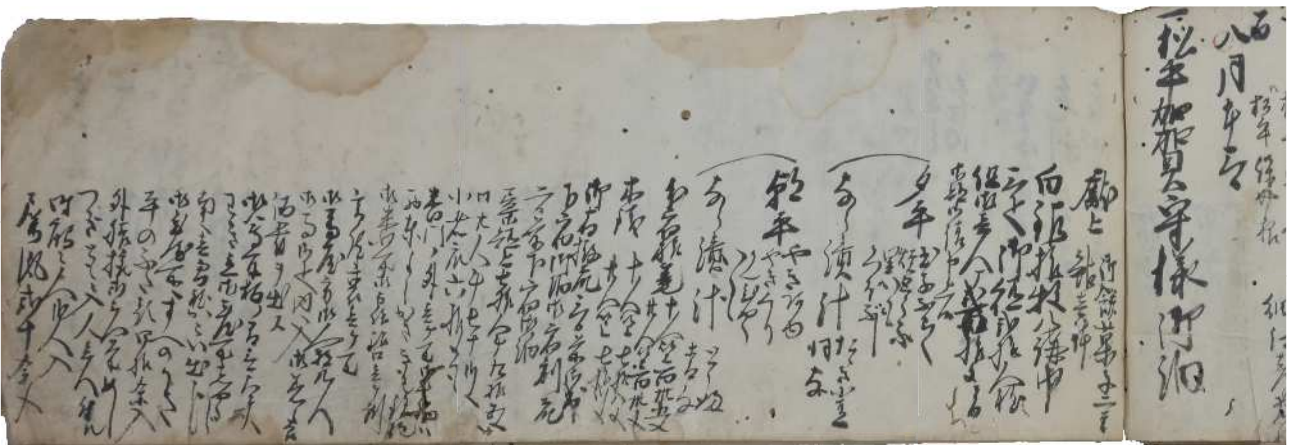
安芸少将（広島藩浅野長訓）が昼
休した際の記録で、藩の旅籠方
役人が前日に宿泊し、準備の指
示が出されました。特に本陣で
の食事内容や本陣で使用した道
具類が書き上げられています。
最後に「御着前至而混雑いたし
候、御着後ハ静ニ御座候（到着
前は非常に混雑し、到着後は静
かになった）」と到着までの慌た
だしさが書き記されています。



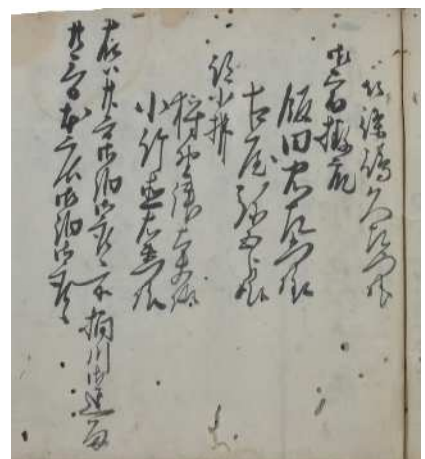
加賀前田家に出された卵料理・焼鮎

「休泊控帳」明和二（一七六五）年
個人蔵／本庄市寄託

松平加賀守（加賀藩前田重教）が宿泊した際の夕食・朝食についての記録。夕食の「玉子ふわふわ」は江戸時代に流行した卵料理のひとつで、とき玉子に調味しただしを加え、厚手の鍋で加熱し、ふんわりと凝固させたものであるとされます。朝食に「焼あゆ」が出ており、鮎は献上品にもたびたびされており、名産といえます。



（夕食・朝食部分拡大）



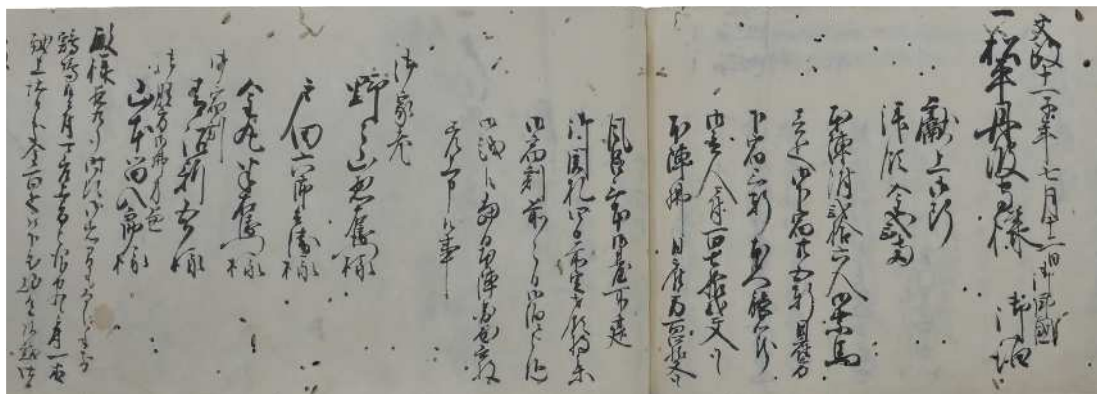
本陣でのさまざまな出来事

鶏好きな殿様

「休泊控帳」文政二（一八二八）年七月二日
個人蔵／本庄市寄託

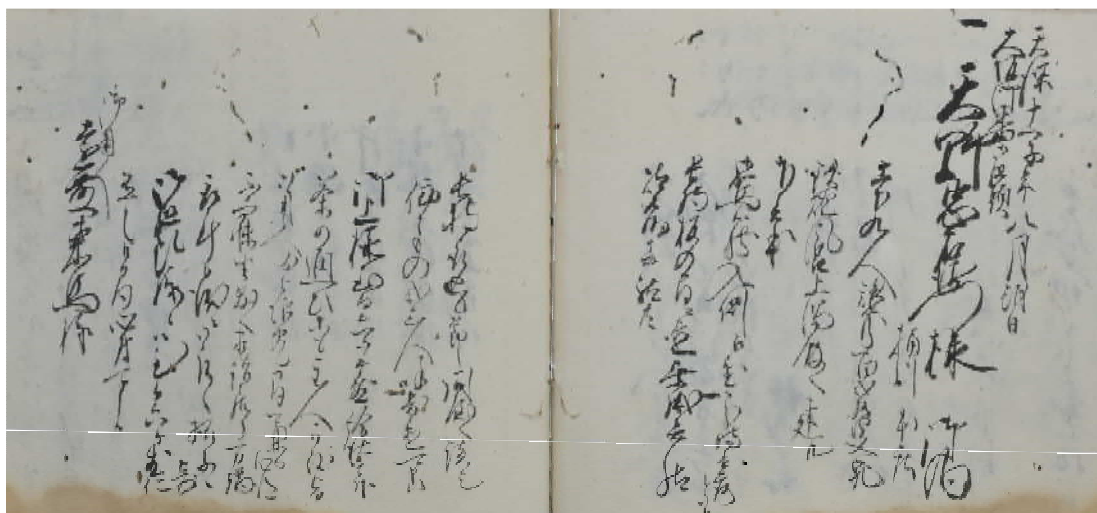
文政四（一八二二）年五月晦日、松平丹波守（信濃国松本藩松平光年）が休息を取った際に「御好二付庭鳥式羽（好物であつたので鶏二羽）」を差し上げました。その後、文政一〇（一八二七）年六月五日にも「手前飼鳥之庭鳥壹番御好二付（私たちが飼っている鶏が一番好物であつたので）」献上したことが記されています。翌年の文政二（一八二八）年七月二日には光年が夜九ツ時（午前〇時）に本陣に到着し、まもなく鶏が鳴いたので、この一番鶏を献上しました。

しばらく後の天保三（一八三二）年九月二四日に宿泊した際には鶏卵一鉢を献上、下賜金二両を拝領しました。その際一〇年ほど以前より鶏献上について休泊の際はお尋ねがあり献上を続けていましたが、今回も同様に献上を行ったことが記録されています。天保六（一八三五）年六月八日の休息の際も駕籠に入れて殿様の御前に差し出したところ、「御氣二入（気に入ったので）」献上しています。その後藩主が交代した後は鶏の記載もなくなり、献上は光年一代だけであつたと思われます。このように藩主の好みを記録し、覚えておくことも本陣にとっては重要なことであつたといえます。



本陣当主の寝ずの番

「休泊控帳」天保二（一八四〇）年八月一日
個人蔵／本庄市寄託



大坂御番組頭の天野忠右衛門が田村本陣に宿泊した際の記録。ここでは「御上様至而六ツヶ敷（お殿様はいたつて難しい性格で）」と気難しい利用者であつたと記されています。本陣当主自ら給仕をすることや寝ずに座敷へ詰めておくよう命じられました。このような記録をあえてつけているところから、本陣当主も心身にくたえたのであろうと思われれます。

犬の返還対応

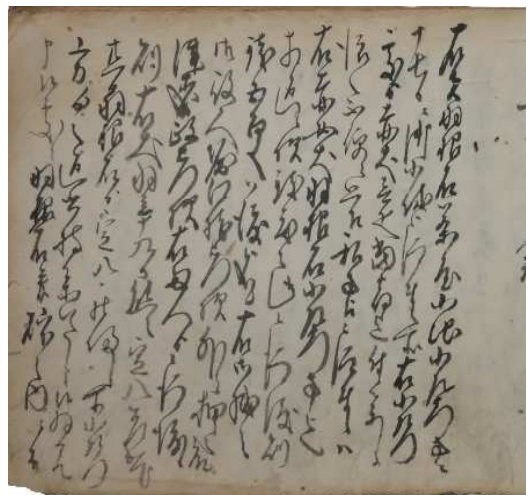
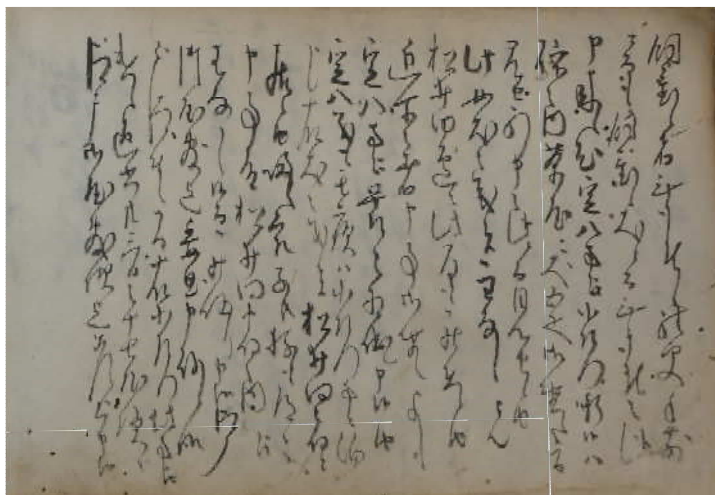
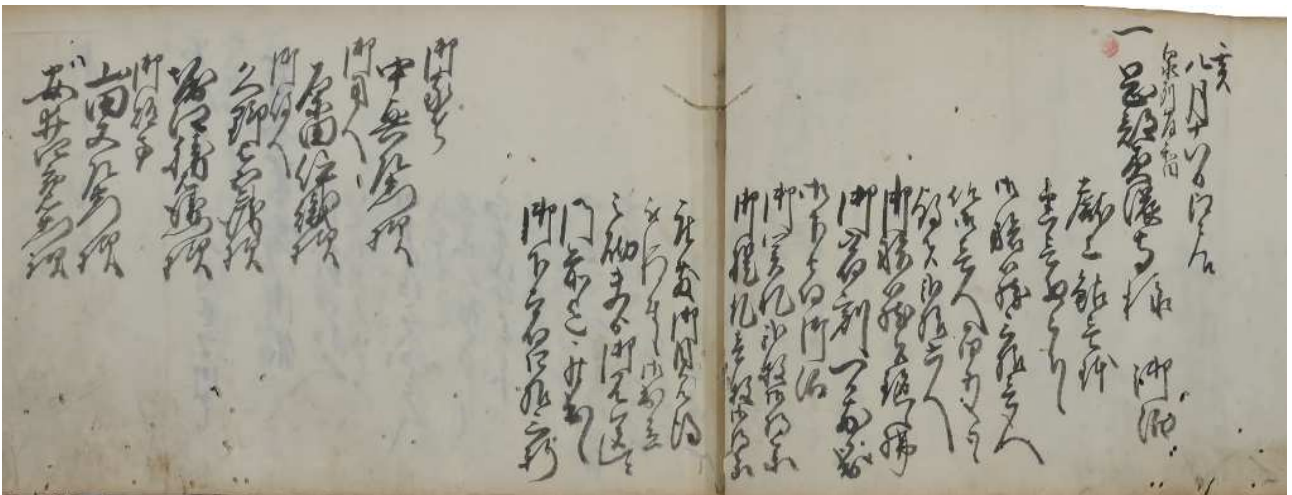
「休泊控帳」宝暦五（二七五五）年八月二八日
個人蔵／本庄市寄託

岡部美濃守（和泉国岸和田藩岡部長著）が宿泊した際に羽石茶屋（群馬県安中市）の小池小左衛門方より「赤犬壹疋、当宿迄付参候（赤犬が一匹本庄宿まで付いてきた）」と行列に犬が付いてきたことが書かれています。

藩士より銭五貫文が渡され、犬の返還を依頼された田村本陣では一九日に小池小左衛門方へ向かいました。しかし小左衛門の話では羽石茶屋の犬ではなく、「手前二而も飼置候犬二而無御座候（私が飼っている犬ではありません）」と小左衛門家の飼い犬でもありませんでした。帰りに道すがら子どもに尋ねても松井田宿辺りには犬がいるとの返答があるのみでした。

そして田村本陣では小左衛門の返書を添えて、岸和田藩江戸藩邸に書状を届けています。

このような事件はあまり記されるものではないですが、印象に残る出来事として記録されたと思われる。



凡例

- ・本書は二〇二四年一〇月二二日（土）から二〇二五年一月三日（月・祝）まで旧本庄商業銀行煉瓦倉庫で開催の「中山道と本陣―「休泊控帳」をひもとく―」の展示解説図録として作成しました。
- ・本書に掲載した資料写真の順序は必ずしも展示の順序と一致するものではありません。
- ・資料写真は当館が撮影を行いました。
- ・本書の執筆は秋山寛行（本庄早稲田の杜ミュージアム学芸員）が、編集を松橋由希（本庄早稲田の杜ミュージアム学芸員）が行いました。

参考文献

- ・大熊喜邦『東海道宿駅と其の本陣の研究 附中山道宿駅と其の本陣』（丸善一九四二年）
- ・大島延次郎『本陣の研究』（吉川弘文館、一九五五年）
- ・豊田武・児玉幸多編『体系日本史叢書二四 交通史』（山川出版社、一九七〇年）
- ・『近世交通史料集五 中山道宿村大概帳』（吉川弘文館、一九七二年）
- ・丸山雍成『近世宿駅の基礎的研究 一・二』（吉川弘文館、一九七四年）
- ・児玉幸多監修・山本光正解説『五街道分間延絵図全百三巻之内』中山道分間延絵図 第四巻（東京美術、一九七八年）
- ・諸井六郎『江戸時代本庄史』（歴史図書社、一九八一年）※原題『徳川時代之武蔵本庄』（一九二二年）
- ・児玉幸多『宿場と街道―五街道入門―』（東京美術、一九八六年）
- ・児玉幸多編『日本交通史』（吉川弘文館、一九九二年）
- ・忠田敏男『参勤交代道中記―加賀藩史料を読む―』（平凡社、一九九五年）
- ・長谷川勇編『中山道本庄宿 田村本陣休泊控帳』（さきたま出版会、二〇〇七年）
- ・丸山雍成『参勤交代』（吉川弘文館、二〇〇七年）
- ・根岸茂夫『大名行列を解剖する 江戸の人材派遣』（吉川弘文館、二〇〇九年）
- ・大石学監修、太田尚宏・佐藤宏之編『東海道四日市宿本陣の基礎的研究』岩田書院、二〇〇一年
- ・本庄市教育委員会文化財保護課『本庄市の鎌倉街道と中山道―ほんじょうの古道と歴史―』（二〇一三年）

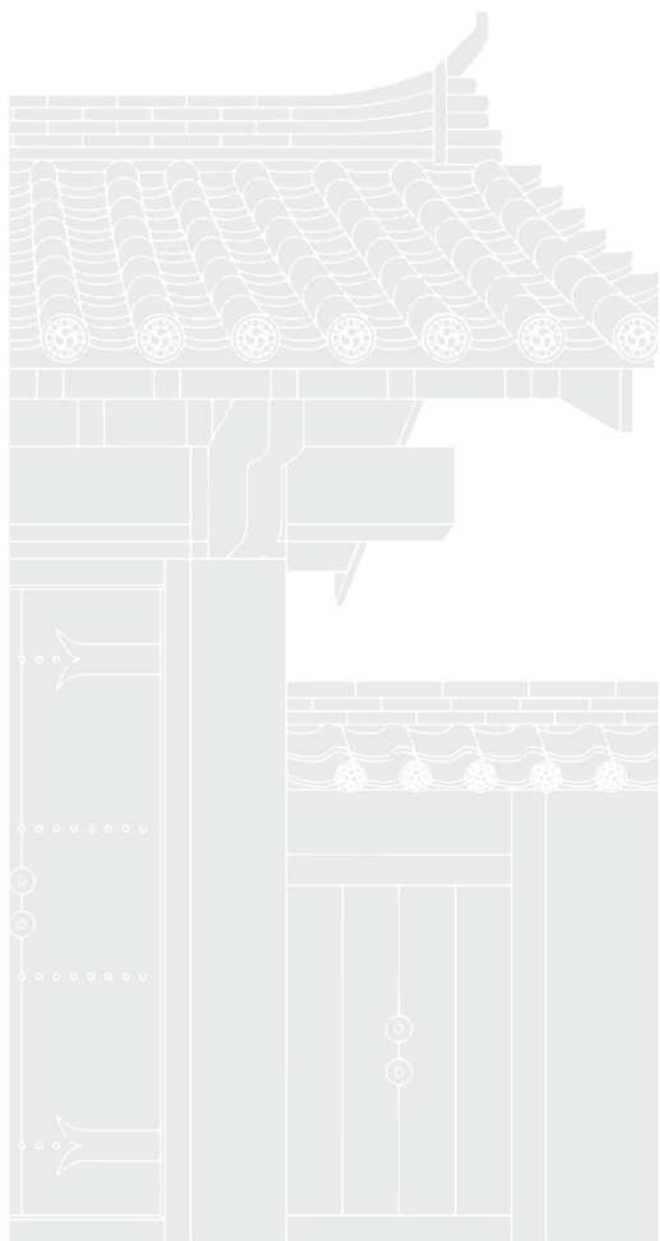
- ・久住祐一郎『三河吉田藩・お国入り道中記』（集英社インターナショナル、二〇一九年）

論文

- ・林英夫「宿駅における本陣の饗宴」（林英夫他編『旅と街道』光村図書、一九八五年）
- ・柴崎起三雄「英甫 田村本陣作兵衛事」（『本庄市史拾遺』第三号、一九八八年）
- ・長谷川勇「田村本陣休泊控帳から」（『児玉地方の文化財』創刊号、二〇二五年）

図録

- ・江戸東京博物館『参勤交代―巨大都市江戸のなりたち―』（一九九七年）
- ・福島県立博物館『武者たちが通る―行列絵図の世界―』（二〇〇一年）
- ・『街道開設四百年記念 中山道展』（二〇〇二年）
- ・松戸市立博物館『大名の旅―本陣と街道―』（二〇〇七年）
- ・真田宝物館『大名の旅―松代藩の参勤交代―』（二〇二二年）
- ・埼玉県立歴史と民俗の博物館『にっぽん歴史街道 江戸の道―絵図で語る宿場と関所―』（二〇一四年）



本庄早稲田の杜ミュージアム企画展

中山道と本陣

なかせんどう

休泊控帳

をひもとく

ほんじん

本庄早稲田の杜ミュージアム企画展
中山道と本陣ー『休泊控帳』をひもとくー
令和6（2024）年10月12日 発行

主催 本庄早稲田の杜ミュージアム
編集・発行 本庄早稲田の杜ミュージアム

〒367-0035 埼玉県本庄市西富田1011 ☎ 0495-71-6878 FAX 0495-71-6879 ✉ hwmm@city.honjo.lg.jp  <https://www.hwmm.jp/>